

◆エルサイズのサルがバトルする国へ 木戸悠加

ここは「救世主」を意味する中南米エルサルバドル。私は青年海外協力隊小学校教育算数隊員として、この国に来了。現職校の小学校の子どもたちには、日本では聞き慣れないこの国の名前を、覚えて欲しいがために「エルサイズのサルが、バトルする国！」と冗談めいた語呂を残してきた（ちなみにそんな大きな猿はいない）。赤道直下



に位置するエクアドルではない。メキシコの南に位置する、四国ほどの面積の中に約六百万人が暮らすこの国の人々の笑顔はとても魅力的である。街を歩けば必ず聞こえてくる挨拶の声。見知らぬ外国人の私にも目が合えばニコッと笑いかけてくれる。学校に行けば子どもたちは教師に抱きついて挨拶を交わし、教師はそれに応え、互いに思い合っていると云わんばかりに心を伝え合う。こういった風習を目の当たりにするとエルサルバドルにしかない温かさに胸を打たれる。

◆エルサルバドル人の温かさ

任地であるサンイシドロの人々は日本人に対して大変友好的である。小学校教育ボランティアが今回で3代目であるため、日本人を見ても差別的な言葉は決して言わず、老若男女問わず気軽に挨拶を



交わしてくれる。日本の発達した自動車機械産業、アニメや漫画の文化、そしてエルサルバドルでは十分ではない安全に生きていける環境に憧れを抱いており、それについてよく話す機会が多い。

時間を見つけてはできる限り知人の家に出向き、会話をしたり食事を楽しんだりして情報収集や信頼関係作りに努めてきた。学校教育以外にも、女性を支援する団体との関連を図り、週に一度 30 分程度の体操に親しむ時間を設けている。その功をなしてか、住民たちと過ごす時間はとても居心地が良く、首都から任地に戻ってくる度に、ここが自分の居場所だと思わせてくれる。

◆授業は午前だけだけど宿題はなし

子どもたちに宿題をする習慣はない。毎日、音読、計算、漢字ドリルをこなす日本の子どもたちに話すと「エッ！」と驚かれそうだが、教師がたまに指定する課題を学級の一、二割程度の子どもたちが行ってくるといった現状である。筆記用具や学習ファイルを家で確認して持ってくるなんて、当たり前のことかもしれないが、なかなかそれが難しい。



また授業開始の鐘は手動で鳴らすため、時間通り四五分間の授業時間確保は容易ではない。ひどい時には一校時が三十分未満になる。午前中しか授業がない上に、ランチ給食のような間食の時間が朝九時頃から始まる。給仕の準備ができたタイミングで食べられるようになるので、校時に給食の課程は組み込まれていない。授業が軌道に乗ってきた時に、給食のお姉さんが呼びに来るなんてことも稀ではない。

なので私は早々に日本の固定観念で物事を考えることはやめた。時間に操られて仕事をするのも馬鹿馬鹿しい。腕時計も外した。授業できるそのわずかな時間に、どれだけわかりやすい

授業ができるか勝負するスタイルに切り替えた。自分は学力向上のために来た専門家ではなく、いちボランティアとして現地の先生や子どもたちと一緒に時間を共有し、共に成長していく人間同士なんだと考えると、見返りを求めないで外国人の私を受け入れてくれる、この国の人々が心から愛しく思えてくる。

現在の日本での私

私は現在、日本で日本の子どもたちにエルサルバドルでの経験を話すことで国際協力の大切さを問うている。大好きな国への恩返しである。

木戸悠加氏

JICA現職参加青年海外協力隊として、2015年7月から1年9ヶ月間エルサルバドルのサンイシドロ小中学校にて主に算数科の教授法を指導する。現在は帰国し小学校教師として指導に携わる。